

あゆみ通信

VOL. 170

あゆみの会(真宗大谷
派大阪教区第2組同朋
の会推進員連絡協議会)
会長 細川 克彦
広報 本持 喜康

**きくというは
信心をあらわす
御のりなり**

一念多念文意

(前略)
「きくとい
うは 信心
をあらわす
御のりなり」
と法語にあ



るように、「聞」と言うことが信心をあらわすとは、どういうことなのでしょう。信心と言うことが、真実に目覚めることを意味するのであれば、「聞」と言うことは自分の都合に合うことだけを聞いて自我を満足させるのではなく、教えを聞くことによって、自分の真実の姿が明らかになり、身の事実に目覚めることを言うのでしょうか。つまり、自我で聞いていくのではなく、「聞」により自我が根底から問われ、自我に執着しているこの身が明らかになることを、「聞即信」として教示されているように思えます。

親鸞聖人は29歳の時に、吉水に居た法然上人から本願念仏の教えを聞き、信心を得る身となられました。それは本願念仏の教えが自分の考えに合ったために、納得して信心を得たと言うことではなく、教えとの出遇いか阿彌陀仏との出遇いとなり、自らが煩惱具足の凡夫であることに目覚め、信心を得られたのだと言えます。そこには吉水で民衆の苦しみの叫びを聞いた法然上人の姿と、民衆が申す念仏の声を通して阿彌陀仏からの声をこの身に聞き、救われて行った親鸞聖人のお姿が見えてきます。

「聞」と言うことは、本願念仏の教えを教養話として聞いて、知識を蓄えていくことではなく、何よりも自我に執着する我が身が明らかになることにより、成立すると言えるでしょう。

ひらはらあきむね

(平原晃宗「今日のことは2019」より)

あゆみの会・朋友会 合同研修会

昨年に引き続き、第2組の時代を担う青年組織「朋友会」と合同研修会を開催します。ご都合のつかれる方のご参加をお待ちします。

日時 6月25日(日) 13:30
会場 法山寺(阿倍野区天王寺町)
講題 この身への正しいおもい
講師 藤原 智先生

(法山寺 副住職)

○第2組6月聞法会

日時 6月16日(金) 14:00
会場 宗恩寺(天王寺区四天王寺)
講師 宮部 渡先生

(15組 西稱寺)

参加費 500円

その他、2023年会費
受け付けております。



大推協公開講座案内

日時 6月6日(火) 14:00
会場 難波別院同朋会館講堂
講題 南無阿彌陀仏～人として生まれた意味をたずねていこう～

講師 藤井 真隆先生

(第2組即應寺住職、)

参加費 無料

第2組

聞法会スタート



去る4月27日(木)
午後2時より、今年度第1回目の第2組聞法会が天王寺区の紹隆寺(喜左上恵子住職)において、ご講師に大橋

恵真先生(第18組遠慶寺住職)をお迎えし、組内の住職や寺族、門徒や推進員等26名が参加して開催されました。大橋先生には、昨年4月28日以来、二度目のご出講をいただきました。

先生は3年余りのコロナによる行動の制限等により、毎日
を無駄に過ごしてしまったと

親鸞のことば

どんなに深い苦悩も救われる

貪愛・瞋憎の雲霧 常に真実
信心の天に覆えり(正信偈)

「貪愛」とは、何かを貪り求めること。「瞋憎」とは、思い通りにならないものに怒りや憎しみを感じることです。このような人間の苦悩は雲や霧のように、太陽(阿彌陀さまの救いのはたらき)を覆ってしまうと、その苦悩の深さが語られています。分厚い雲や深い霧が発声した時、太陽の光を遮って、朝・昼であってもあたりが暗く感じる場合があります。しかし、太陽そのものが無くなってしまったわけはありません。どれほど人間の苦悩が深くても、そのはたらきに気が付かなくても太陽は常に私たちを照らし続けているのです。

(名古屋別院監修「人生を照らす親鸞の言葉」より)

「ええ塩梅に老いてます」と医者か言う

Mさんの「柳」です。身近に老いを感
じている自分にとっては、考えさせら
れる「柳」です。「ええ塩梅^{あんばい}」とはどう
いう状態を言うのか、考えてみました。
歳相応の体力?、それとも体調?

そこで、以前、宮城賢先生が、和田綱
先生のことを書かれていたのを思い出
しました。曰く、「この先生が80歳に
なっておられるのですが、会うたびに
元気になってくれる。そして「面白
いねえ」とこう言われる。「いやあ、
足が曲がらなくなっただけ」それから
「耳が聞こえなくなっただけ」と。

「面白いんですか」と聞くと「人間足
が曲がらなくなるとこういう思いをする
のかと。あるいは人が言っていること
が聞こえなんだらこういう孤独感に
陥るのかと」「毎日新しい体験をさせ
てもらっている」と。私たちはいつも
過去をモノサシにしてこんなことにな
ればいいかな、ことなんです。かたが
えのない「今」を生きることが出来ず
におる。和田先生のように今ある在り
方を私としてそこに常に新しい自分に
出会うことなのだと。考え
させていただくことに。(本)

か、充実した日々を過ごすことが出来なかったとか、つい考えてしまうのではないかと問いかけられました。



しかし、仏さまの智慧をいただくと、無駄な人生とか、空しい一日とか一瞬と言うものはないと気づかされましたと話されました。

善し悪しについても、善い一日、悪い一日と考えてみたり、また、善い人、悪い人と考えたりしてしまうことがあるが、それらは自分にとって都合が善いか悪いかに基づいていることが多く、決して本当にそうとは言えないことが『歎異抄』(真宗聖典640~641頁)か



ら教えられと。

また、「念仏衆生は、横超の金剛心を窮むるかゆえに、臨終一念のタベ、大般涅槃を超証す」(同250頁)を「南無阿彌陀仏と正しい信心をもって念仏する人は、自分の人生において都合の良いこと(晴れ)も、都合の悪いこと(雨)も、全部丸ごと自分の人生であると引き受けて生きていくことが出来るので、どんな一日であっても、充実した尊い一日としていただいくことができるのです。そしていのち終わっていく時に、本当の意味で自分の人生を完成、完結していくことができるのです」と、意識(資料)され、阿彌陀さまの本願のお心(智慧)に気付いてくださいと、常に呼びかけておられると、具体的な日頃の生活の中から例を引きながら、分かりやすくお話くださいました。(レポート：細川克



彦(佛足寺))

紙上法話

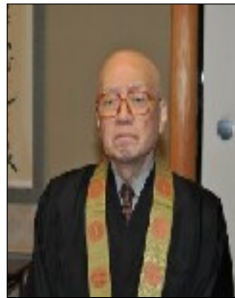
和国の教主②

親鸞聖人における聖徳太子観

池田勇諦先生

和国の教主

もう一つは、「和国の教主聖徳皇」(聖典508P)と言うことです。



「日本の国のお釈迦さま」と言われるのです。聖徳太子を「日本の国のお釈迦さま」とまで敬い慕っている方は、日本仏教の歴史では親鸞聖人しかいません。「和国の教主」とは、際立ったお言葉です。つまり日本の仏教は聖徳太子から始まっているのだ。聖徳太子いまさずば、今日我々は本願念仏の仏法にお遇いすることは出来なかったのだ。そういう深い恩徳を親鸞聖人が表現しておられると言うことがうかがわれます。この2点について皆さんと聞いてまいります。(中略)さて、現在自坊の同朋講座では西村見暁先生が遺された、清澤満之先生のお言葉を書名としておられる『世界統一国家の原造者』をテキストとしている最中です。この本を繰り返し読ませていただくと、「親鸞聖人の聖徳太子観」をうかがう上で、強い示唆を受けるのです。

「三つの願い」一暁鳥敏

と申しますのも、清澤満之先生の教えに生きられた暁鳥敏先生は、昭和28(1953)年2月の講話の中で、「三つの願い」(野本永久「暁鳥敏伝」大和書房)を語っておられます。先生は翌年(昭和29<1954>)年8月27日に西帰されますので、まさに亡くなられる直前、最晩年の発願です。

その「三つの願い」と言うのは、「その一つは、親鸞聖人の700回忌のご法事を勤める」(「広大会」昭和28年5月号『聖徳太子を勧請す一太子忌

講話一」)、それはただ単にご法要を勤めればよいと言うのではなく、ご法要を機縁として親鸞聖人の教えを世界に向かって発信しなければならないと言うこと。「もう一つは聖徳太子様の『17条憲法』研究によって、日本国の憲法改正運動を起こすと言うこと」、そして三つ目は「臘扇堂の建立」です。これらが「三つの願い」です。ご承知の通り、明達寺境内の臘扇堂は、暁鳥先生の喜寿の記念として着工され、落慶は亡くなられる直前の昭和29(1954)年8月20日でありました。さらに親鸞聖人の教えを世界に広めなければならないと言うこと、聖徳太子の『17条の憲法』の精神をもって日本国憲法を制定しなければならないと言うこと、特にこれら二つの願いに私は注目させております。

「富国強兵」一福沢諭吉

私たちはお念仏の教えを宗派根性と申しましょうか、極めて狭いセクト意識で聞いていることを根深く引きずっているのですが、清澤先生が果たされた仕事を憶いますと、セクトをこえて本願念仏のおみのりの普遍性を明らかにしてくださったと言わずにはおれません。

清澤先生と同じ時代を生きた一人に福沢諭吉(1835-1901)がいます。福沢諭吉が28歳の時に清澤先生は生



まれ、福沢諭吉没後2年で清澤先生は亡くなっておられます。同じ時代を生きておられるお二人なのですね。福沢諭吉と言いますと、皆さん方は実にご縁が深いですね。(笑)毎日お目にかかっているのではございませんか。(笑)その福沢諭吉の著書に『文明論之概略』があります。その本が書かれた時代背景として、時は明治維新ですから、それまでの幕藩体制が崩壊して新しい国づくりが始まったところです。(つづく)